

論 文

Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) の臨床的有用性に関する文献展望 —PRISM 変法の検討および描画法との比較を通して—

京都大学大学院教育学研究科 糖尿病心理臨床研究会
坂間 博康 (D3)、加藤 結芽 (D3)、村上 千理 (D3)
坂田 英里奈 (D2)、高橋 芳 (実践D1)
足立 龍誠 (M2)、坂口 穂乃佳 (M2)、根本 梢 (M2)
山口 幹子 (M2)、鈴木 陵我 (M1)
梅村 高太郎 (京都大学大学院教育学研究科)

Literature Review on the Clinical Effectiveness of Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) —Examination of PRISM Variations and Comparison with Clinical Drawings—

SAKAMA, Hiroyasu ; KATO, Yume ; MURAKAMI, Chisato
SAKATA, Erina ; TAKAHASHI, Kaori
ADACHI, Ryusei ; SAKAGUCHI, Honoka ; NEMOTO, Sho
YAMAGUCHI, Mikiko ; SUZUKI, Ryoga
UMEMURA, Kotaro

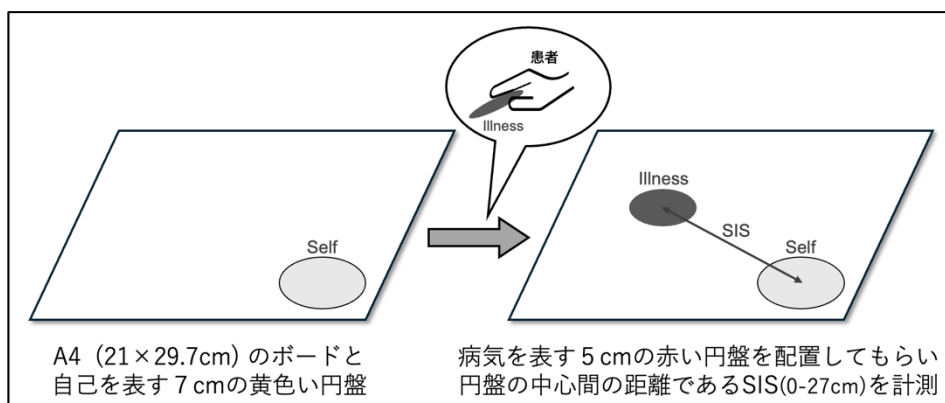
キーワード : PRISM、レビュー、臨床的有用性

Key words : PRISM, Review, Clinical effectiveness

I 問題と目的

Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) は、Büchi et al. (1998) によって開発さ

図1 PRISM 実施の様子¹⁾



れたアセスメントツールである。PRISM 原法 (Büchi & Sensky, 1999) では、右下に直径 7 cm の黄色の円盤が固定された A4 サイズの白い金属ボードを使用し、ボードが現在の自分の生活を、円盤が「自己 (Self)」を表していると想像するように教示する。その後、磁石がついた直径 5 cm の「病気 (Illness)」^(注1)を表す赤色の円盤を渡し、現時点の生活の中で「病気」の円盤をどこに置か尋ねる。自己と病気、2つの円盤の中心間の距離は、Self-Illness Separation (SIS) と呼ばれている (図 1)。SIS が小さいほどその人の病気による苦しみが大きいとされ、SIS は病気による痛みや抑うつなど様々な質問紙尺度との相関が認められている (Sensky & Büchi, 2016)。当初身体疾患に対する精神的苦痛をアセスメントするために開発された PRISM であるが、以降精神疾患や対人関係、仕事等、生活における重要な要素と自己の関連を測る変法も開発され、様々な心理的様相を捉えるための応用が試みられている (大江ら, 2021)。

先行研究で、PRISM のレビュー論文は 2 本ある。Sensky & Büchi (2016) は、PRISM を使用した論文の系統的レビューを実施し、複数の PRISM の変法を提示した上で、変法の種類にかかわらず、PRISM がどのように機能するかについて、一般的な概念化を目的として研究を行なった。また大江ら (2021) は、①PRISM 開発初期の論文の紹介、②最近 10 年間の海外の関連論文において、PRISM がどのようなテーマ・尺度とともに論じられてきたか、③日本国内での PRISM 研究の流れについて概説している。その上で急性ストレス障害患者の事例を提示して、「SIS の変化は、面接時の回復に関する治療者の実感と比較的合致」していたことや、心的外傷体験との距離を直接測定するため、心的外傷体験以外のストレスの影響を受けにくいという利点について指摘し、「PRISM の最大の特徴として、トラウマのような通常尋ねることが相手の心理的侵襲につながりかねない事柄についても比較的回答が容易である」とまとめている。

PRISM は、SIS 等の数量的な情報を得られるだけではなく、富岡 (2008) が「新しい投影法」として PRISM を提示しているように、臨床心理面接での有用性についても指摘されている。一方で、先に示したレビュー論文も含め、先行研究では SIS 等の数量的な指標についての議論が中心で、臨床的な有用性については各論文における断片的な記述にとどまり、体系的にまとめた論文は見当たらない。また、先の Sensky & Büchi (2016) は PRISM の一般的な概念化を目的とした研究であったが、各変法の用いられ方やアセスメントの対象は異なるため、臨床的有用性も変法ごとに異なると考えられる。

そこで本研究は、PRISM の臨床的有用性を明らかにすることを目的にレビューを行う。そのため第 1 に、PRISM とその変法の独自性に着目し、各変法の特徴をレビューしてそれぞれに固有の有用性について考察する。そして第 2 に、PRISM の臨床的有用性に関する指摘を先行研究の記述から抽出し整理する。技法の有用性について議論するためには、高橋 (2022) が「新しく創出する技法は、より有用なのか、何らかの相違する側面が見られるのか、その技法はより治療的に使用できるのか、臨床的なのか」考える必要があると述べているように、他の技法との比較検討を行うことが重要だと考えられる。そこで本研究では、心的イメージを視覚的に表現できるという共通点をもつ描画法との比較を通して、PRISM の特徴や臨床的有用性について提示することを目指す。

Ⅱ. 方法

検索は、2024 年 6 月 15 日に実施した。文献検索のデータベースは、CiNii、PubMed、Web of Science の 3 つを用いた。当該の PRISM に関連する論文のみを抽出するため、CiNii の検索ワードは、「Pictorial

Representation of Illness and Self Measure」 「PRISM+心理」 「PRISM+心身」とした。PubMed と Web of Science の検索ワードは、大江ら (2021) を参考に 「"prism" AND "illness" AND "self"」 とした。

検索の範囲はタイトルとアブストラクトとし、対象文献の種類は日本語と英語の論文に限定し、抄録・会議録は除いた。検索結果から、当該の PRISM とは関係のない略語や英単語として PRISM が用いられている論文や重複を除き、74 件の論文が抽出された。また、検索では抽出できなかった、先行レビュー論文 (Sensky & Büchi, 2016 ; 大江ら, 2021) に引用されている論文 4 件を加えた。

まず、この 78 件の論文において PRISM がどのように用いられているのかについて調査し、PRISM の変法ごとに、それぞれのアセスメントの対象と、固有の特徴についてまとめた。

表 1 PRISM 文献リスト

番号	筆頭著者 (出版年)	タイトル
1	Büchi, S. (1999)	PRISM: Pictorial Representation of Illness and Self Measure: A Brief Nonverbal Measure of Illness Impact and Therapeutic Aid in Psychosomatic Medicine
2	Büchi, S. (2002)	Preliminary Validation of PRISM (Pictorial Representation of Illness and Self Measure) -A Brief Method to Assess Suffering
3	平本哲哉 (2003)	内観療法により向精神薬を減量, 中止することができた遷延性うつ病の 1 症例 -PRISMを用いた検討-
4	富岡光直 (2003)	心身症の治療 34. PRISM
5	Büchi, S. (2007)	Grief and Post-Traumatic Growth in Parents 2-6 Years after the Death of Their Extremely Premature Baby
6	Töndury, B. (2011)	The Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) Instrument Reveals a High Burden of Suffering in Patients With Chronic Urticaria
7	Niedermann, K. (2011)	Effectiveness of individual resource-oriented joint protection education in people with rheumatoid arthritis. A randomized controlled trial
8	Niedermann, K. (2012)	Six and 12 months' effects of individual joint protection education in people with rheumatoid arthritis: A randomized controlled trial
9	Lima-Verde, AC. (2013)	Cross-Cultural Adaptation and Validation for Portuguese (Brazilian) of the Pictorial Representation of Illness and Self Measure Instrument in Orofacial Pain Patients
10	Gielissen, MFM. (2013)	Pictorial Representation of Self and Illness Measure (PRISM): A Graphic Instrument to Assess Suffering in Fatigued Cancer Survivors
11	Krikorian, A. (2013)	Assessing suffering in advanced cancer patients using Pictorial Representation of Illness and Self-Measure (PRISM), preliminary validation of the Spanish version in a Latin American population
12	山田憲一 (2014)	糖尿病のある人生について語り始める時 糖尿病対話マップ
13	Kok, T. (2017)	Using the Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) to Quantify and Compare Suffering From Trauma and Addiction
14	Nowicka-Sauer, K. (2017)	The Paradox of Waiting for Heart Transplant: Between Control and Fate
15	Wang, Y. (2018)	Pictorial Representation of Illness and Self Measure-Revised 2 (PRISM-R2): an effective tool to assess perceived burden of thyroid cancer in mainland China
16	Goetzmann, L. (2018)	Transplantation experience as a predictor for quality of life during the first 6 months after lung transplantation
17	Brady, B. (2019)	Recognising ethnocultural diversity in chronic pain assessment: validation of the Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) for use with culturally diverse communities
18	Tomioka, M. (2021)	The effectiveness of Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) for the assessment of the suffering and quality of interpersonal relationships of patients with chronic pain
19	Osthoff, AKR. (2022)	Lessons learned from a pilot implementation of physical activity recommendations in axial spondyloarthritis exercise group therapy
20	Gao, J. (2022)	Preliminary Validation of Pictorial Representation of Illness and Self Measure-Revised 2 (PRISM-R2): An Effective Tool for Assessing Suffering of Patients with Spinal Cord Injury in Mainland China
21	Naganuma, K. (2022)	Visual Assessment of Therapeutic Relationships in Psychiatric Patients: A Pilot Study Using the Pictorial Representation of Illness and Self Measure
22	Schmalz, G. (2022)	Comparison of PRISM and numeric scale for self-assessment of learning progress during a clinical course in undergraduate dental students
23	Munkácsi, B. (2023)	Examination of the Illness Representations among Children with T1DM in Relation to Mental Health Factors
24	Corazza, M. (2023)	Suffering and Quality of Life Impairment in Patients with Eczematous Diseases: Results from an Observational Study Assessing the Relevance of the Involvement of Two Sensitive Body Sites, Namely, the Face and Hands
25	Schmalz, G. (2024)	Illustration of self-perceived knowledge, skills, and interests in undergraduate dental students using a visual metaphor

次に、この 78 件の論文を対象に臨床的有用性について言及された記述を探した結果、25 件の論文において記述が認められた（表 1）。レビュー対象から抜き出した臨床的有用性に関する記述を、香月（2009）による「臨床場面における描画の有効性」のカテゴリ分類や定義を参考に、描画と共通する有用性や PRISM 独自の有用性という観点から分類した。

Ⅲ. 結果と考察

1. PRISM とその変法について

1) PRISM

英語論文としての初出は、Büchi et al.（1998）である。現在の標準的な使用法は、問題と目的で記したような、A4 サイズの白い金属製のボードや紙に、右下の隅に直径 7 cm の黄色い円盤が固定されたものが提示され、その上に 5 cm の赤い円盤を置いてもらう方法である（Sensky & Büchi, 2016）。ただし、PRISM 開発当初は「生活」を表すのは A4 サイズの白い紙、「自己」の黄色い円盤が直径 6 cm、「病気」の赤い円盤が直径 4 cm であったり（Büchi et al., 1998）、ボードと黄色い円盤は現在と同じであるが、「病気」を示す赤い円盤が 4 cm であったり（Büchi & Sensky, 1998）²⁾ するなど、円盤は開発の過程でさまざまな大きさが使用されていた。

標準的な PRISM の教示は以下の通りである（Büchi & Sensky（1999）を筆者らが和訳）。

「あなたの病気（*illness*）[病名を挙げる]が、現在のあなたの生活にどのような影響を及ぼしているのか、よりよく理解したいと思っています。

このボードが、今のあなたの生活を表していると想像してください。右下の黄色い円盤は、「自分」を表し、この赤い円盤はあなたの病気を表しています。あなたの病気（赤い円盤）を、今の生活のどこに置きますか？ [赤い円盤を患者に手渡す]

この教示の理解が難しい場合は、次の説明をする。

「これは、あなたの生活における病気の位置を示す少し変わった方法かもしれないので、別の例を挙げてみます。

青い円盤は、あなたの職業や仕事を表しています。人によっては、仕事は自分の生活にとって不可欠なものであり、自分自身に対する見方を大きく左右します。そのような人は、「仕事」の円盤を「自分」の円盤の上に置くでしょう [これを実演する]。他の人にとっては、仕事はそれほど重要ではありません。例えば、ただお金を稼ぐためだけに働くかもしれません。そのような人は、「仕事」の円盤を「自分」の円盤からかなり離れたところに置くでしょう [実演する]。

あなたの病気（赤い円盤）を、今の生活のどこに置きますか？ [赤い円盤を患者に手渡す]

2) PRISM の修正版

PRISM は、その修正版が作成されている（PRISM-R1, PRISM-R2）。PRISM-R1（PRISM-R）の初出は、Reimus et al.（2007）である。通常の PRISM との大きな違いは、A4 の紙の右下に固定されている黄色い円盤のサイズが 52 mm であること、健康上の問題を表す赤い円盤（シール）を、異なる 3 つのサイズ（直径 35

mm、52 mm、65 mm) から自分の病気観に最もよく合うものを1つ選ぶという操作が加わっていることである。そのため、SIS だけでなく、円盤の大きさを表す IPM (Illness Perception Measure) という変数が加わったという特徴が見られる。PRISM-R1 では、SIS は苦しみを表し、IPM は主観的な病気の重症度を表すとされている。

PRISM-R2 の初出は、Wouters et al. (2008) である。通常の PRISM との大きな違いは、PRISM-R1 のように円盤を3つのサイズから選ぶことに加え、生活を表す紙が直径 186 mm の大きな円となっていること、そして自分の人生の中心を「自己」と一致させるため、自己の円盤を中央に配置することである。生活を表す用紙の中心に「自己」があることにより、課題に対する患者の混乱が少なくなる可能性が示唆されている。

しかし、Sensky & Büchi (2016) は PRISM-R1 や R2 を用いた研究では、原法の PRISM と異なり、PRISM のアセスメント対象と関連する質問紙尺度得点と、SIS 間に有意な相関はほとんど報告されておらず、PRISM が視覚的な心の表現 (visual metaphor) として機能する場合、PRISM の手順を複雑にすると、その有効性が損なわれる可能性があることを指摘している。

3) PRISM+ (extended PRISM)

PRISM+は、Büchi & Sensky (1999) が英語論文としての初出であり、従来の「病気」の円盤に加え、家族、仕事、趣味、友人などさまざまな色の円盤を追加したものである。PRISM+は、「病気をその生物心理社会的な文脈の中に『マッピング』することを可能に」し、「患者によりよい理解とよりよい自己管理の機会を提供」するものとされている (Büchi & Sensky, 1999)。

また、富岡 (2003) では、「理想の状態」の PRISM+作成により、病気の側面以外を意識し、自発的に目標を語ることに繋がった事例が紹介されており、「病気」以外の円盤の配置により、患者の視点が広がることが示唆される。

PRISM+を用いて対人関係のあり方や質を測る試みもなされている。例として、Tomioka (2021) の PRISM-KV (Kyudai Version) が挙げられる。この方法では、通常の PRISM の実施後に、患者にとって重要な他者やもの、出来事について12色の5cmの円盤から選んで配置することを求め、最後に、現在の医療を表す色付きの円盤を1つ選択し、置くように教示する。SISに加え、自己と重要な他者の円盤間の距離 (Self/Significant others Separation ; SSoS) と、自己と医療を表す円盤間の距離 (Self/Medical care Separation ; SMcS) により、重要な他者や医療ケアスタッフへの印象を把握することが可能だとされている。

4) デバイス上で行う PRISM

PRISM を紙やボードではなく、タブレット等の電子デバイス上で行う試みも報告されている³⁾。初出論文である Peter et al. (2016) では、原法の PRISM と同じ手順かつ円盤が同じサイズになるよう画面表示し実施しているものの、その後の研究ではさまざまなサイズや使用法で用いられており、例えば Bodas et al. (2022) では、「感染症 (水色)」、「社会の崩壊 (緑)」など複数の脅威を表す円盤が用いられている。また、アプリ上では円盤に文字や写真でラベルを貼ることができるなど、従来の PRISM よりも自由度が高いものとなっている。

5) 自己記入式・描画式の PRISM

円盤を使用する代わりに、+印や円を患者に描いてもらう手法もある。

Rumpf, H. J., et al. (2004) による modified-PRISM では、教示文を読んだ上で円盤の代わりに+印を記載する形式になっている。この方法では、PRISM が質問紙の一部として使用できるように、教示文を読んで回答者が自ら記入する形式が取られているため、実施が容易であるという特徴がある。なお、Rumpf et al. (2004) では、生活を表す用紙は一辺の長さが 6 cm の正方形、自己を表す円は直径 1 cm と変更されているが、modified-PRISM の形式を使用した論文（例えば、Büchi et al., 2007 など）では、生活を表す用紙や自己を表す円の大きさは変更されており、必ずしも正方形の用紙が使用されるわけではない。

Sándor et al. (2020) による PRISM-D では、右下隅に直径 7 cm の黄色い円が印刷された A4 サイズの用紙に、円盤を置く代わりに赤いサインペンで「病気」を描くように教示がなされる。そしてその後、さまざまな色（黄色、オレンジ、ピンク、紫、青、緑、茶色、黒）のサインペンを使用して、生活の中で重要な要素を表す別の円を追加して描くことが求められる。SIS だけでなく、PRISM+と同様に重要な要素間の距離を求めたり、PRISM-R1 と同様に描いた円の大きさから IPM を求めたりすることができる。また、円を描画するため、迅速かつ低コストで実施でき、円盤のサイズと位置を患者自身が変更することで、病気と個人のリソースをより思い通りに表現できることが特徴である。

6) その他の変法

Marinello et al. (2016) は、慢性疾患患者（アトピー性皮膚炎）の親を対象にした Caregiver-PRISM を提示した。ボードは親自身の生活、黄色い円盤は親自身の自己を表し、通常の PRISM と同様であるが、直径 5 cm の赤い円盤は「子どもの皮膚病」を表すという違いがある。黄色の円盤と赤い円盤の中心間の距離は、SICS (Self/Illness of the Child Separation) とされ、親が経験する苦痛のレベルを評価するための指標となっている。このように、自己の病気の苦しみだけでなく、周囲の人 (Caregiver) の苦しみを測定する方法も開発されている。

さらに PRISM もしくは PRISM+の形式を採用し、病気以外の事象と自己との関係について捉えようとする技法も作成されている。例えば、Harbauer et al. (2013) は、「病気」の円盤の代わりに「自殺傾向 (suicidality)」を表す黒い円盤を使用し、自殺傾向をアセスメントする PRISM-S という方法を提示している。また、Schmalz et al. (2022) は、教育における実技や理論的知識についての学習の進捗を評価するために PRISM を応用し、「病気」の円盤の代わりに教科やスキル等の”Object”を用いて、自己 (”Subject”) の円盤との距離を用いた。その結果 PRISM は、0~10 といった数値による評定よりも、自身の学習についての自己評価を容易にし、自身のスキルについての批判的な内省を促進することが指摘されている。

2. 臨床的有用性について

各論文に記載された有用性を抜き出し分類した結果、描画と共通する有用性 9 個、PRISM 独自の有用性 3 個の、計 12 個のカテゴリにまとめられた。

1) 描画と共通した PRISM の臨床的有用性

香月 (2009) の「臨床場面における描画の有効性」の分類と定義を参照し、PRISM の臨床的有用性を分

類した結果、描画と共通した PRISM の臨床的有用性は以下の 9 個にまとめられた (表 2)。

表2 描画と共通するPRISMの臨床的有用性

PRISMの臨床的有用性	説明	出典の例
① 情動体験を促す	PRISMで円盤を置くことや作成したPRISMをめぐる対話から、病気等をめぐる情緒について語る機会となる	Töndury et al. (2011)、Osthoﬀ, AKR. (2022)
② 主体性の回復／自律性を養う	自らの問題や人生を振り返ることを通して、治療に対する主体性や自律性が増す	平本 (2003)、Nowicka-Sauer, K. (2017)、Brady, B. (2019)、Schmalz et al. (2022/2024)
③ 問題の対象化／外在化	視覚的ツールにより、問題や人生における大事な側面について、対象化や外在化が可能になる	Wang et al. (2018)、Gao, J. et al (2022)
④ 備忘録・経過観察として活用	SISや円盤の配置を通して過去・現在・未来の生活を比較することができる	Büchi & Sensky (1999)、Gielissen et al. (2013)
⑤ 言語化の促進	PRISM作成の際に円盤間の関係性を考える必要があるため、現在の生活をめぐる状況について言語化するきっかけとなる	富岡 (2003)、Goetzmann et al. (2018)
⑥ 言語表現力の不足を補う／言語化の迂回	PRISMを通して言葉では表現しきれないことや、表現できないことについて、視覚的に伝えることができる	Büchi & Sensky (1999)、Büchi et al. (2007)、Munkácsi et al. (2023)
⑦ 関係性の構築／患者治療者間の緊張を和らげる	PRISMを間に挟むことで、治療者との緊張を和らげ、信頼関係を構築するためのツールとなりうる	富岡 (2003)、Niedermann et al. (2012)、Naganuma et al. (2022)
⑧ 短時間での施行	患者の時間的負担が少なく実施できる	山田 (2012)
⑨ 直接的でインパクトのある情報伝達的手段／患者について周囲の共通理解を促す	患者の状況を直感的に把握することが可能であり、患者の関係者間で、PRISMを通じた共通理解が可能となる	Tomioka et al., (2021)

① 情動体験を促す

PRISM の作成時の語りにより感情を自由に表現する機会を作る (Töndury et al., 2011) ことや、PRISM 自体がコミュニケーションツールとなり、患者の情報や感情を引き出すことにつながる (Osthoﬀ, AKR., 2022) など、PRISM により病気等をめぐる情緒について語る機会が増える。

② 主体性の回復／自律性を養う

疾患の経験の肯定的な側面に患者が焦点を当てるようになり、適応的な対処能力、精神的健康、治療への順応性が得られる (Nowicka-Sauer et al., 2017) ことや、PRISM 実施者と患者間のディスカッションによって治療への関与を促し、行動変容の基盤を提供する (Brady et al., 2019) など、自らの問題や人生を振り返ることを通して治療に対する主体性や自律性が増す。

③ 問題の対象化／外在化

患者が病気を別の「もの」として捉え、その人やその人の人生を覆い隠さないようにする助けとなること (Wang et al., 2018) や、自分の内面的な痛みを外在化し、病気との関係を振り返るのに役立つ (Gao et al., 2022) など、PRISM が視覚的なツールであることにより、問題や人生における大事な側面について対象化や外在化することができる。

④ 備忘録・経過観察として活用

PRISM は用紙として残すことが可能なため、継時的変化を測定でき (Büchi & Sensky, 1999)、過去における生活の様子と比較することができる。

⑤ 言語化の促進

PRISM 作成時に円盤間の関係性を考える必要があるため、PRISM 作成時点で思考が整理され(富岡, 2003)、現在の生活をめぐる状況について言語化するきっかけとなる。

⑥ 言語表現力の不足を補う／言語化の迂回

非言語的な課題であることで言葉での表現が難しい感情を表現できる (Büchi & Sensky, 1999) ことや、直接悲しみや苦しみについて患者が言語的に表現しなくても、重要な情報を得ることができる (Büchi et al., 2007) ことなど、PRISM を通して自分のことについて言語化せずとも視覚的に伝えることができる。

⑦ 関係性の構築／患者治療者間の緊張を和らげる

PRISM を間に挟むことで緊張が和らぎ話しやすくなる (富岡, 2003)、治療者とのコミュニケーションを強化し、重要な情報を得ることで治療プロセスを補強・改善できる (Niedermann et al., 2012) など、治療者に対する緊張を和らげ、信頼関係を構築するためのツールとなりうる。

⑧ 短時間での施行

10 分以内に実施できる (山田, 2012) など、患者の時間的負担が少なく実施できる。

⑨ 直接的でインパクトのある情報伝達的手段／患者について周囲の共通理解を促す

医師・看護師・心理士などの医療スタッフが、患者の状態を直感的に把握できる (Tomioka et al., 2021)。そのため、医療専門職だけでなく患者の関係者との間でも PRISM を通して共通理解が可能となる。

2) PRISM に特徴的な臨床的有用性

香月 (2009) の分類と比較して、PRISM に特徴的だと考えられる有用性は、以下の 3 点であった (表 3)。

表3 PRISM に特徴的な臨床的有用性

PRISM の臨床的有用性	説明	出典の例
① 関係性の数量化・評価	病気だけでなく生活において重要なものと自己の関係性について、数量化を含めたアセスメントをすることで、臨床心理面接における優先度の評価や臨床的介入効果の測定が可能となる	Büchi et al. (2002)、Lima-Verde et al. (2013)、Kok et al. (2017)
② リソースやニーズの把握	生活の多くの側面におけるリソースやニーズを明らかにすることが可能となり、理想の状態や未来について、患者が自発的に語ることに繋がりうる	Niedermann (2011)、Corazza et al. (2023)、Krikorian et al. (2013)
③ 重要な価値観の図示・アセスメント	苦痛に影響を与えているものや懸念していることについて、治療者が想定していなかったことも含めて明らかにすることができる	Büchi et al. (2002)、Töndury et al. (2011)

① 関係性の数量化・評価

病気に対する懸念の度合い (Büchi et al., 2002) や治療効果 (Lima-Verde et al., 2013) の数量化ができることや、(依存症の苦しみと PTSD による苦しみなど) 異なる構成概念間でも苦痛のレベルの比較が可能であり、臨床心理面接で扱うテーマの優先度の評価ができること (Kok et al., 2017) が挙げられている。このように病気に限らず、生活において重要なものと自己との関係性を数量化・評価するツールや、臨床心理面接における臨床的介入の効果を評価するツールとして使用ができる。

② リソースやニーズの把握

今後の変化について予想し、未来について話すことを可能にする (Büchi & Sensky, 1999) ことや、症状がコントロールされていて治療者からは問題がないように見える患者であっても、生活の多くの側面におけるニ

ーズを明らかにできる (Niedermann, 2011) ことが指摘されている。このように、疾病や症状以外の、対人関係も含めた生活の多くの側面におけるリソースやニーズを明らかにすることが可能となり、理想の状態や未来について患者が自発的に語ることにもつながりうる。

③ 重要な価値観の図示・アセスメント

病気やその他の重要な側面と、自己との関係性を図で表現できる (Büchi et al., 2002) ことや、症状の経過とは別に患者の病気に対する認識や、苦痛に悪影響を与える要因を明らかにし、対処できるようにする (Töndury et al., 2011) ことなどが指摘されている。治療者は、治療のため症状の変化に着目する場合があるが、症状だけでなく患者の懸念や価値観が病気による苦痛に影響を与えることがあり、PRISM によって治療者が想定していなかった患者の価値観を明らかにすることができる。

3. まとめと今後の課題

PRISM は、身体疾患といった病気をはじめとして、精神症状や人間関係、教育の評価など、幅広いテーマに応用が可能なツールであり、円盤や紙を用意できない場合でも、描画として使用したりタブレット等のデバイスのアプリで実施したりするなど、各臨床現場に合わせて実施できる。また、PRISM は描画と同様に患者が心の内を外在化・対象化することを可能にし、人生における体験の言語化や情動体験を促すコミュニケーションツール、あるいは言葉で表せないことを表現するツールとなりうる。

PRISM に特徴的な有用性は、苦痛だけでなく、ニーズやリソースを含めた患者の生活における様々な「関係性」を直接的にアセスメントし、生活や人生について整理できる点であると考えられる。そして、現在の生活の状況だけでなく、富岡 (2003) の事例のように「理想の状態」について尋ねることも可能である。そのため、例えばソリューション・フォーカスト・アプローチにおける「ミラクルクエスチョン」(De Jong & Berg, 2012 など) や「タイムマシン・クエスチョン」(黒沢, 2008) と同時に使用し、現在の問題が解決した際の自分の生活の状況や、その時の対人関係などについて想像する際に、視覚的な補助として活用する方法も考えられる。

PRISM の事例を詳細に提示した論文は、Büchi & Sensky (1999)、富岡ら (2003)、Töndury et al. (2011)、Nowicka-Sauer et al. (2017) の 4 つしか見当たらず、十分とは言えない。患者の苦しみに合わせて柔軟に使用できることが PRISM の長所であり、先行研究が示すように臨床現場によって様々な使用法が想定できるため、より効果的に PRISM を用いるためにも、今後数量的な調査のみならず事例研究を重ねて検討してゆく必要がある。

また、本研究においては PRISM との比較のため、類似点が多く先行研究の蓄積がある描画法を用いたが、配置するといった共通点を持つ投映法として、「図式的投影法」(水島, 1986) などが挙げられる。さらにこうした他の投映法と比較することを通じて、PRISM の臨床的有用性や独自性について考察を深める必要があるであろう。

注)

1) "Illness" の訳語として、「疾患」や「病い」も先行研究で用いられているが、本研究では「病気」で統一する。また、心理臨床の領域では、来談

者や相談者は通常「クライアント」が使用されるが、本論文では先行研究の表記に合わせて、「患者」で統一する。

2) Büchi & Sensky (1998) は、ドイツ語論文である。

3) PRISM を紹介するホームページ (www.prismium.ch) の [What is PRISM?] タブ内の [One app] から詳しい情報を見ることができる。(2024年10月25日確認)

付 記

本研究は、2024年に日本ロールシャッハ学会第28回大会でポスター発表した内容を、大幅に加筆・修正したものです。コメントをいただいた先生方に感謝申し上げます。

引用文献

- Bodas, M., Peleg, K., Stolerio, N., & Adini, B. (2022). Risk Perception of Natural and Human-Made Disasters-Cross Sectional Study in Eight Countries in Europe and Beyond. *Frontiers in Public Health*, **10**, 825985. <https://doi.org/10.3389/fpubh.2022.825985>
- Brady, B., Veljanova, I., Andary, T., Southwell, T., & Chipchase, L. (2019). Recognising ethnocultural diversity in chronic pain assessment: validation of the Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) for use with culturally diverse communities. *Health and Quality of Life Outcomes*, **17**, 56. <http://dx.doi.org/10.1186/s12955-019-1126-9>
- Büchi, S., Buddeberg, C., Klaghofer, R., Russi, EW., Brändli, O., Schlösser, C., Stoll, T., Villiger, PM., & Sensky, T. (2002). Preliminary Validation of PRISM (Pictorial Representation of Illness and Self Measure) – A Brief Method to Assess Suffering. *Psychotherapy and Psychosomatics*, **71**(6), 333-341. <https://doi.org/10.1159/000065994>
- Büchi, S., Mörgeli, H., Schnyder, U., Jenewein, J., Hepp, U., Jina, E., Neuhaus, R., Fauchère, JC., Bucher, HU., & Sensky, T. (2007). Grief and Post-Traumatic Growth in Parents 2–6 Years after the Death of Their Extremely Premature Baby. *Psychotherapy and Psychosomatics*, **76** (2), 106-114. <https://doi.org/10.1159/000097969>
- Büchi, S., Sensky, T., Sharpe, L., & Timberlake, N. (1998). Graphic Representation of Illness: A Novel Method of Measuring Patients' Perceptions of the Impact of Illness. *Psychother Psychosom*, **67**, 222–225. <https://doi.org/10.1159/000012284>
- Büchi, S. & Sensky, T. (1998). Pictorial Representation of illness and Self Measure (PRISM) – eine einfache Visualisierungsmethode für Forschung und Praxis. *Verhaltenstherapie*, **8**(2), 112–117. <https://doi.org/10.1159/000030636>
- Büchi, S. & Sensky, T. (1999). PRISM: Pictorial Representation of Illness and Self Measure: A Brief Nonverbal Measure of Illness Impact and Therapeutic Aid in Psychosomatic Medicine. *Psychosomatics*, **40**(4), 314-320. [https://doi.org/10.1016/s0033-3182\(99\)71225-9](https://doi.org/10.1016/s0033-3182(99)71225-9)
- Corazza, M., Flacco, ME., Schettini, N., & Borghi, A. (2023). Suffering and Quality of Life Impairment in Patients with Eczematous Diseases: Results from an Observational Study Assessing the Relevance of the Involvement of Two Sensitive Body Sites, Namely, the Face and Hands. *Dermatology*, **239**(3), 368-378. <https://doi.org/10.1159/000528822>
- De Jong, P. & Berg, I.K. (2012). Interviewing for Solutions 4th ed. California: Brooks/Cole.
- Gao, J., Wang, YB., Xie, HX., Wu, AR., & Zhang, ZQ. (2022). Preliminary Validation of Pictorial Representation of Illness and Self Measure-Revised 2 (PRISM-R2): An Effective Tool for Assessing Suffering of Patients with Spinal Cord Injury in Mainland China. *Journal of Biological Regulators and Homeostatic Agents*, **36**(6), 2025-2035. <http://dx.doi.org/10.23812/j.biol.regul.homeost.agents.20223606.210>
- Gielissen, MFM., Prins, JB., Knoop, H., Verhagen, S., & Bleijenberg, G. (2013). Pictorial Representation of Self and Illness Measure (PRISM): A Graphic Instrument to Assess Suffering in Fatigued Cancer Survivors. *Psychological Assessment*, **25**(2), 658-663. <https://doi.org/10.1037/a0031526>
- Goetzmann, L., Seiler, A., Benden, C., Boehler, A., Büchi, S., Jenewein, J., Ruettner, B., Mueller-Alcazar, A., & Weierstall, R. (2018). Transplantation experience as a predictor for quality of life during the first 6months after lung transplantation. *Clinical Transplantation*, **32**(10), e13393. <https://doi.org/10.1111/ctr.13393>
- Harbauer, G., Ring, M., Schuetz, C., Andreae, A., & Haas, S. (2013). Suicidality Assessment with PRISM-S - Simple, Fast, and Visual A Brief Nonverbal Method to Assess Suicidality in Adolescent and Adult Patients. *Crisis-The Journal of Crisis Intervention and Suicide Prevention*, **34**(2), 131-136. <https://doi.org/10.1027/0227-5910/a000164>
- 平本哲哉・野崎剛弘・富岡光直・高倉修・河合宏美・河合啓介・瀧井正人・久保千春 (2003). 内観療法により向精神薬を減量、中止することができた遷延性うつ病の1症例—PRISMを用いた検討—. *心療内科*, **7**(4), 304-309.
- 香月菜々子 (2009). 星と波描画テスト：基礎と臨床的応用. 誠信書房.
- Kok, T., De Haan, HA., Sensky, T., van der Meer, M., & De Jong, CAJ. (2017). Using the Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) to Quantify and Compare Suffering From Trauma and Addiction. *Journal of Dual Diagnosis*, **13**(2), 101-108. <https://doi.org/10.1080/15504263.2017.1293867>
- Krikorian, A., Limonero, JT., Vargas, JJ., & Palacio, C. (2013). Assessing suffering in advanced cancer patients using Pictorial Representation of Illness and Self-Measure (PRISM), preliminary validation of the Spanish version in a Latin American population. *Supportive Care in Cancer*, **21**, 3327-3336. <http://dx.doi.org/10.1007/s00520-013-1913-5>
- 黒沢幸子 (2008). タイムマシン心理療法: 未来・解決志向のブリーフセラピー. 日本評論社.

- Lima-Verde, AC., Pozza, DH., Rodrigues, LLFR., Velly, AM., Guimaraes, AS. (2013). Cross-Cultural Adaptation and Validation for Portuguese (Brazilian) of the Pictorial Representation of Illness and Self Measure Instrument in Orofacial Pain Patients. *Journal of orofacial pain*, **27**(3), 271-275. <http://dx.doi.org/10.11607/jop.1070>
- Marinello, E., Linder, D., Spoto, A., Palmer, K., Rohrer, P.M., Büchi, S., Trapp, M., Trapp, E.M., Hoerlesberger, N., Piaserico, S., Peserico, A., Gatta, M., & Fortina, A.B. (2016). Assessing the Impact of Atopic Dermatitis on the Patients' Parents with the Visual Instrument 'Caregiver-PRISM'. *Dermatology*, **232**(4), 490-495. <https://doi.org/10.1159/000448030>
- 水島恵一 (1986). 第6章 図式的投影法—図式的に表現されたイメージ— 水島恵一・上杉喬 (編) イメージの人格心理学 誠信書房, 152-207.
- Munkácsi, B., Felszeghy, E., Kenyhercz, F., & Nagy, BE. (2023). *International Journal of Mental Health Promotion*, **25**(8), 961-969. <https://doi.org/10.32604/ijmhp.2023.027319>
- Naganuma, K., Oe, M., Ishida, T., Kobayashi, Y., Chiba, H., Matsuoka, M., & Ozone, M., (2022). Visual Assessment of Therapeutic Relationships in Psychiatric Patients: A Pilot Study Using the Pictorial Representation of Illness and Self Measure. *The Kurume Medical Journal*, **69**(3.4), 159-165. <https://doi.org/10.2739/kurumemedj.MS6934005>
- Niedermann, K., de Bie, RA., Kubli, R., Ciurea, A., Steurer-Stey, C., Villiger, PM., Büchi, S. (2011). Effectiveness of individual resource-oriented joint protection education in people with rheumatoid arthritis. A randomized controlled trial. *Patient Education and Counseling*, **82**(1), 42-48. <https://doi.org/10.1016/j.pec.2010.02.014>
- Niedermann, K., Büchi, S., Ciurea, A., Kubli, R., Steurer-Stey, C., Villiger, PM., De Bie, RA. (2012). Six and 12 months' effects of individual joint protection education in people with rheumatoid arthritis: A randomized controlled trial. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, **19**(4), 360-369. <http://dx.doi.org/10.3109/11038128.2011.611820>
- Nowicka-Sauer, K., Jarmoszewicz, K., Pietrzykowska, M., & Batkiewicz, S. (2017). The Paradox of Waiting for Heart Transplant: Between Control and Fate. *Experimental and Clinical Transplantation*, **15**(6), 696-699. <http://dx.doi.org/10.6002/ect.2016.0019>
- 大江美佐里・長沼清・石田哲也・小林雄大・千葉比呂美・松岡美智子・小曾根基裕 (2021). PRISM (Pictorial Representation of Illness and Self Measure) 二次元評価ツールとしての現状と今後の可能性. 最新精神医学, **26**, 451-458.
- Osthoff, AKR., Vlieland, TPMV., Meichtry, A., Van Bodegom-Vos, L., Topalidis, B., Büchi, S., Nast, I., Ciurea, A., & Niedermann, K. (2022). Lessons learned from a pilot implementation of physical activity recommendations in axial spondyloarthritis exercise group therapy. *BMC Rheumatology*, **6**(1), 12. <http://dx.doi.org/10.1186/s41927-021-00233-z>
- Peter, N., Kleinjung, T., Horat, L., Schmidt-Weitmann, S., Meyer, M., Büchi, S., & Weidt, S. (2016). Validation of PRISM (Pictorial Representation of Illness and Self Measure) as a novel visual assessment tool for the burden of suffering in tinnitus patients. *Health Qual Life Outcomes*, **14**, 47. <https://doi.org/10.1186/s12955-016-0454-2>
- Rumpf, H.J., Löntz, W., & Uessler, S. (2004). A Self-Administered Version of a Brief Measure of Suffering: First Aspects of Validity. *Psychotherapy and Psychosomatics*, **73**(1), 53-56. <https://doi.org/10.1159/000074440>
- Reimus, J.L.M., Vingerhoets, A.J.J.M., Soons, P.H.G.M., & Korstanje, M.J. (2007). Suffering in psoriasis patients: its relation with illness severity and subjective well-being. *International Journal of Dermatology*, **46**(10), 1042-1045. <https://doi.org/10.1111/j.1365-4632.2007.03191.x>
- Sándor, Z., Látos, M., & Csabai, M. (2020). Using PRISM-D drawing test for the examination of associations of perceived social support among inpatients with chronic medical conditions. *Orvosi Hetilap*, **161**(39), 1688-1696. <https://doi.org/10.1556/650.2020.31827>
- Schmalz, G., Büchi, S., Haak, R., Ziebolz, D., & Strauss, M. (2024). Illustration of self-perceived knowledge, skills, and interests in undergraduate dental students using a visual metaphor—results of a monocentric cross-sectional study. *BMC Medical Education*, **24**, 271. <https://doi.org/10.1186/s12909-024-05257-w>
- Schmalz, G., Kreher, D., Sensky, T., Büchi, S., & Ziebolz, D. (2022). Comparison of PRISM and numeric scale for self-assessment of learning progress during a clinical course in undergraduate dental students. *BMC Medical Education*, **22**, 894. <https://doi.org/10.1186/s12909-022-03967-7>
- Sensky, T., & Büchi, S. (2016). PRISM, a Novel Visual Metaphor Measuring Personally Salient Appraisals, Attitudes and Decision-Making: Qualitative Evidence Synthesis. *PLoS One*, **11**(5), e0156284. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0156284>
- 高橋昇 (2022). 投映法の創意と工夫. ロールシャッパ法研究, **26**, 58-61.
- 富岡光直 (2008). 心療内科と投影法. 小川俊樹 (編) 現代のエスプリ別冊 投影法の現在, pp. 202-211. 至文堂.
- 富岡光直・荒木登茂子・早川洋・久保千春 (2003). 心身症の治療 34. PRISM. 心療内科, **7**(1), 40-46.
- Tomioka, M., Hosoi, M., Okuzawa, T., Anno, K., Iwaki, R., Kawata, H., Kubo, C., & Sudo, N. (2021). The effectiveness of Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) for the assessment of the suffering and quality of interpersonal relationships of patients with chronic pain. *BioPsychoSocial Medicine*, **15**, 22. <https://doi.org/10.1186/s13030-021-00223-0>
- Töndury, B., Muehleisen, B., Ballmer-Weber, BK., Hofbauer, G., Schmid-Grendelmeier, P., French, L., & Büchi, S. (2011). The Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) Instrument Reveals a High Burden of Suffering in Patients With Chronic Urticaria. *Journal of Investigational Allergology & Clinical Immunology*, **21**(2), 93-100.
- Wang, YB., Fan, SY, Wang, HB., Li, L., Jia, YY., & Chai, L. (2018). Pictorial Representation of Illness and Self Measure-Revised 2 (PRISM-R2): an effective tool to assess perceived burden of thyroid cancer in mainland China. *Supportive Care in Cancer*, **26**, 3267-3275. <http://dx.doi.org/10.1007/s00520-018-4172-7>
- Wouters, E.J.M., Reimus, J.L.M., van Nunen, A.M.A., Blokhhorst, M.G.B.G., & Vingerhoets, J.J.M. (2008). Suffering quantified? Feasibility and psychometric characteristics of 2 revised versions of the Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM). *Behavioral Medicine*, **34**(2), 65-78. <https://doi.org/10.3200/bmed.34.2.65-78>
- 山田憲一 (2014). 糖尿病のある人生について語り始める時 糖尿病対話マップ. 糖尿病診療マスター, **12**(4), 373-379.